やりとして居る譯には行かぬ。其上、自由行動の盛んな時であるから、彼方で玩具の奪ひ合ひがあるかと思ふと此方では打ち合が始まる。會、今日は靜かだなと思ふと、けたゝましい叫聲は怪我人の出來たことを報ずると云ふ樣に中々油斷も隙もあつたものではない。決して呑氣で樂だなどゝ考へ可き時ではない。教育は生きた事業である。人間の活動に形式を與ふることが教育の仕事である以上は呑氣でないのは當然の事であらう。此活劇の間に奮鬪してこそ始めて幼兒を完全に躾くることが出來るのである。保育室に坐らせて置いて、談話や唱歌をして居る中に躾が出來ると思ふ人は血の通つて居る人形を作らんとする人の理想であつて我等生きた人間を作らんとして居るものゝ考へ及ばぬ所である。

サア、斯うなると次には幼兒を如何に躾す可きかと云ふことは是亦重大な問題でなる。保育法の改良問題は此方面にも大に横はつては居るが、限りある頁數を興味少き理屈談で埋める樣になるから是は次號を期することゝしよう。要するに保育法改良の第一着として幼兒の隨意遊戯を指導し如何に有効に過さしむ可きかと云ふことに研究の歩を進めるのが最も至當なことであると思ふ。

野猪の話

平島權藏

今は昔源右府が富士の卷狩の折に名を殘し、後の世までも兒女の耳を聳へしむるのが、曾我の夜討と、仁田の四郎が野猪の仕止めとで在ました。此野猪に就て少しく御話致しませう。

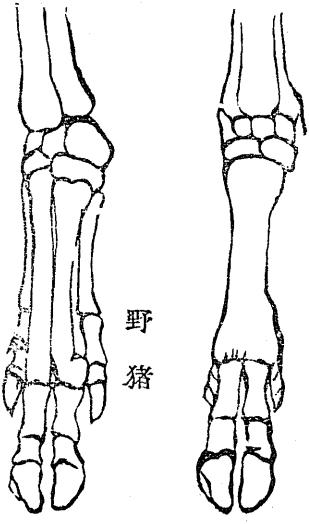
偖て野猪を唯、何の氣もなしに觀ますと、丁度オサツに箸でも突き挿した樣で、誠に不恰好なもので生態上とて何の意味も無ささうで在ます。所がなか〳〵大有りで先づ第一に

一、圓錐形の頭　これは二つの楔を合せた樣に

先きが尖つて居て、如何んな物でも是れで押し別け、突き通すといふ樣に出來て居ます上に其後に續く體軀も、又一層大形の楔を合せた樣で太く強いので在ますから、彼れの棲家たる山地の灌木や雜草の生ひ繁る、所謂荆棘の中を造作もなく馳驅する事が出來るのは、魚形水雷が海水を突破すると同じく又鰹や鮪の樣で在ます（所謂彷徨形を致して他の抵抗を少なく致して居ります）

二、短い脚 は力が強くて兩側に二つと、中央に二つとの蹄が、各脚の先きに在ます此蹄は固い骨の上を、角質のもので確かりと包んで居るので在つて、野猪の力を籠めて地を蹈む時には、中央の二つは別れて體を支へ、猶強く蹈む時は兩側に在る、前のよりは稍上方に位するものか是れに次ぎ、都合四ッの蹄で支ふる事になりますから、非常なる力に耐へられます、牛の蹄も是れと同じで、唯兩側のが著しく小さくて全く地を蹈まぬだけが違ひます。

脚の骨比較



三、水田を耕す に馬よりは牛の方が都合が宜しい、と申事は御聞にもなりましたでせう。是れは何故かと申ますと、馬の脚は蹄が一つで、水田の中に深く蹈み込み、再び拔かうと致すと頗る困難で（空氣の壓する面が廣い）在ます、が牛のは蹄が二つに別れて支へますから、割合に深く這入ませぬのみならず拔く時には是れが集まつて、一本の樣になりますからで在ます、野猪のは今一層都合が宜しいから澤でも沼でも自由に涉る事が出來ます、是れから推し考へると、野猪の近い祖先は、沼澤に棲んで居たと申事が判ります、現に歐洲では沼澤計り

に棲んで居る種類が在ります。是れは頗る大形のもので、五十六七貫目に達し、其小供の時には體長に沿ふて縞が在ります。水牛も河馬も其蹄は皆似て居ます。何れも沼澤の動物で、蹄の數から名を取つて偶蹄類と申ます。馬の類は其故に奇蹄類で在ます。次ぎに昔の猪狩の記錄を讀ますと、何の某と銘打つたる鏑矢が、彈き返されてなど申す

四、鐵の樣に固い毛皮 は、是れまた野猪が荊棘を分け行く爲めの、防禦物と見るの外は在ません。又

五、針金の樣な强固なる毛 是れも野猪が突破し進む時を觀察すれば勿論、想像でも直に理會せらるゝ譯で在ます、若し羊の毛の樣で在つて御覽なさい、迚も荊棘を分けて突進するなど、思も寄らぬ事で在ます。

六、小さな眼 は厚い强い瞼で覆ひ被され、深く存在する卽ち奥眼で在ます。是れもどん栗眼の出眼で在つては、荊棘を分け行くに忽ち茨に突き刺さるゝ心配が在るからでせう。

七、彼れの寐床 は枯草などを集めても作りますが、また防禦力弱き子供の爲めには、餘程注意して丁寧に作ります。是れは草ばかりでなく、小枝や茨をも集めて、容易く他獸に侵されぬ樣にするので在ります。然し何れにしても斯樣な寢所では、深い穴居のものなどの樣に、安心して寢る譯には參らぬ、其心を詠める、

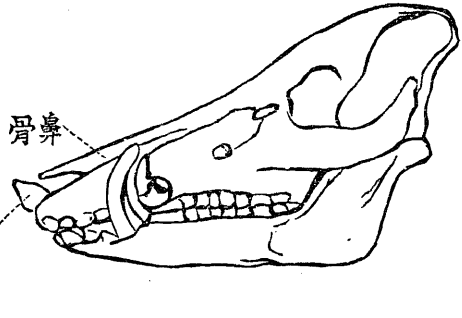
枯草かく臥す猪の床の寐をやすく
さこそ寐ざらめかゝらずもがな

斯樣に彼の體驅は、全く荊棘中を馳驅して、食を獵り敵を追ふに適したる樣に作られて居ます。次ぎに彼れの

八、食物の側から觀察 して見ませう。一般に動物に就て其食物を知らうと思ふには第一に注意するのは齒で在まして、齒は食物の如何に據つて各異つて居ます。肉食の動物では先きが尖り。草

食の動物では先きが濶くなつて居ます。是れは前者は肉を噛み切り引き割くに適し、後者は穀物などを磨り碎き搗き粉なすに適したるもので在ます、所で野猪のは何れで在るかと申すと、

一、前臼齒四枚　是れは牙（犬齒と申ます）の次より數へて四枚で在ます。それが恰ど肉食動物の通り卽ち尖つて居ります。（猫のと同樣）次の三枚卽ち一番奥に並んで居ます齒頭は、上表面が潤くて草食動物の通り骨で在ります（牛のと同じ樣に）。斯の樣に野猪の臼齒は二樣の形を有して居るのを見ますと、何うしても草肉二樣の食物を採るに違ひ在ませぬ、野猪は實に好んで **キノコ　クルミ　クリ　カシ**其他**野生の果物**のみならず **昆虫**並に**其幼虫　蝸牛類　蚯蚓　野鼠**等をも食するので在ます、だから冬期になつて、是等の動物の蟄居せるを探し出す爲めには、植物の根を掘り起し或は皮を剝ぎなどします。又春夏の季節には畑に出で、作物を荒す事が在ます然し概して野猪は、肉食よりは草食の方を好むので在ます。



二、又、前齒は上下に各六枚　在つて割合に大きく、猫と同數で在ります）。頸の骨が前齒の生へて居る所は非常に狹くなつて居ります。だから昆蟲や樫の實などの、小さいものを地上から採つて食べるのに、甚だ都合善く恰度「ピンセット」の樣な働きをいたします。

三、野猪が食を探す　爲めには夜間其臥す猪の床を出で、其所此所と獵り歩きます。彼れの鼻の感覺は實に鋭敏なもので在ます。嗅ぐ事の鋭敏なのは他の獸類にも澤山在ますが、一寸面白い御話を一つ付加へませう。山間などの

誠に途の判かり悪い所に、犬を連れて歩きますと、曲り角曲り角で犬は少づゝ尿を途傍の草木に掛けて然して歸りには鼻でフンフン嗅ぎながら行きます實に感心なもので在ます。

四、耳も非常に能く聞へます　是れに就ても先年私の知人が、德島縣の椿泊と謂ふ所で、此所は山脈が海濱迄達ひて、其間に點々して田畑が在りますが折節春の末つ方野猪（此野猪は祖谷と申す深山から山傳ひに出て參ります）が出て畑を荒すとの事、是を打捕らうと銃を携へ、三四の人々と宵闇に乘じて、海岸に引上げたる船の中に隱れて、其出るのを待つて居ました、すると夜は次第に更け行き、月海上に差昇り、見渡す隈のなき迄に照り渡り、えも言はれぬ景色となりました、今か今かと待ます内に、山の端にフウーフウーと太い鼻息きが聞こえて、黑色の小牛の樣な躰軀が顯れました、と思ふ内に方向を轉じ他方から廻はつて、ガサガサと大きな音をさせながら畑に下りて出まして、隔たりも次第に少なく、今は十間にも足らぬ位になりました、今や火蓋を切らうと思ふ刹那、同行者の一人が他の制止の手振り笑可しいとて、一寸クックッやりましたと思ふや否、野猪は非常なる速力で忽ち雲霞と消えて、跡をも見せませぬでした。其聽覺の鋭い事非常なものだと申ます。

五、是に引き換へて眼は　前にも申た通り奥眼の細眼で、其視力は弱いので在ます。梟の眼は強過ぎて却て晝間は見えませぬ。其他鳩の眼など、一般に鳥の眼は視力強い事、實に想像の外で在ます。一例を申せば百舌鳥などが高い梢に止まりて地上の昆蟲殊にケラなどは土と同色にて、容易に見分けのつかね樣なものでも、能く見出して一文字に飛び下り引き掴みて飛び去るので在ます。野猪などは其反對で在ります次ぎに彼れが

山なぞを荒す事に就て述べます

樹皮の中に棲んで居る、昆蟲の幼蟲などを捕る爲

めに、其樹の瘤樣になつた所を破碎する。又樹の根を掘り起す等の有樣は恐ろしいもので在ます是は

一、彼の頭 が前にも述ました通り長い尖つた楔形をして居るのと、是れに長く突き出たる

二、鼻 には特別に其先端に一ッの吻骨（前の圖參照）が在まして、是れが鼻孔の中に横はり、爲めに鼻は土を掘り岩を起すに都合よく、又非常に强い力が在ます。

三、猪牙 は有名なもので、形こそ象牙などに比す可くも在ませんが、其力其切れ味は非常なもので、實際是れを以て紙などを裁つに容易で在ます。或人は樹枝などをスパリスパリと切る事が出來るとも謂つて居ます。兎に角能く切れるのは野猪の唯一の武器で在ます、此牙と彼鼻とで、人を跳ね飛ばし、獵犬なども誤つて是れに引懸けられると、其腹などが小刀で紙を切るよりも容易に切り割かれて、內臟が飛出し見るも哀に絶息する事が在るそうで在ます。彼れは此牙を常に岩石などで研ぎ澄まして、上唇の內に藏して居ますが、一朝敵を迎ふる時は忽ち露出して、是れに全身の力を籠めるので在ますから恐ろしい。

象牙は上顎から生じて上に曲つて居ますが、野猪のは下顎から生じたのが大きく（前圖）て、上顎のは小さいので在ますが、是れも圖の通り、伸びると上に向ひます。是れで見ますと猪牙は徹頭徹尾武器と思はれます、咀嚼の器械では在ませぬ。

四、昆蟲などを捕る爲め 樹の根を掘り起すのも此牙で在ます。ひどく荒されると樹木が其爲めに枯れるのが出來て、山林家は意外の害を被るので在ます。

又鼻で以て、吾々の容易に動かす事さへ出來ない樣な大きな岩石を、手球の樣にコロコロと容易く押し轉がして、其下の昆蟲蚯蚓などを捕つて食べます。尤も是等の力は彼れの肥太なる

五、體軀の筋力　が基をなす事勿論で在ます。如何なる武器も痩せた體に着いて居ては、偉大の働きは爲し難いもので在ます。

六、首も短く太く　押しの強ひ事を顯はして居ます。然らば首の尤も長い獸類たる、麒麟では如何んな働きをするかと申事は、一寸聯想の起りさうな事で在ますが、亦是れには長ければ長い樣な働きをするもので、彼れは此長い首で敵を打ます其れは横振りに鞭を振る樣にして打ます。其力が非常に強いので、流石の獅子でさへ此一擊には恐怖するさうで在ります次ぎに

野猪の敵は何か

と申すと狼も近時は餘程少なくなりましたし、歐洲などの樣に大きな山猫も居ないので在ますから、今では彼れの唯一の敵は人間で在ませう。

一、人間に對して　野猪は常に逃げるので在ります。が銃丸でも浴びせかけられ、一度負傷せる所謂手負猪となれば、猛烈とも猛烈とも實に狂猛で在ます。斯うなると前にも述べた猪牙を以て、人と言はず犬と言はず、當るを幸ひ引き懸け跳ね飛ばし、蹴飛ばすので在ます。

二、彼れの顎は自由に動く　ので此牙を實に器用に使ふ事が出來ます。其上に體軀の力を加へて下から、上に匙ひ上げる樣にするので在ます又

人間に對しての利害

野猪は夕方になりますと、己れの棲所を出でゝ農園に來る事が在ます。殊に春夏の候に甚しい。イモ、ダイコン、マメ、類をも食するので在ます。此場合野猪は己れの食するだけを、掘るとか喫るとかする計りでなく、無暗に荒し廻はるので害は割合に大きくなります。德島地方で一種の盆躍りが在ます此拍子取りに

篠山通れば篠ばかり　猪豆食てホーイホイ

と申すのが記憶に殘つて居ります。是れは其棲所や食物などを言表はして居ります。實際德島の山地には野猪は多いので山畑（山の中を開墾して作

りたるもので山の谷間に少づゝ在る）などで野猪の出る事を知る、と申のは其足跡や、糞で鑑定するので在ます實に

初雪や狆の足跡こぼれ梅

で二の字を蹈出すは下駄の跡、狆のは梅花の零れた樣に見へます、が野猪のは一寸形容が困難で、重ね八文字とでも申ますか、挿圖を御覽下さい。そして足の骨格と御考へ合せ下さると判然します。兎に角野猪の足跡

是等の特徴で野猪の出る事が明かりますと、番小屋を作り夜番をするので在ます。番小屋では時々空鐵砲を鳴らします。又德島では冬期になりますと

山かぶら　と申て賣りに來ります（東京では山鯨）其れは脚の肉の着いたのを擔いで來ります。是れは僞物で無い證據、羊頭を掲げて狗肉は賣らぬので在ます。野猪の肉は冬期殊に嚴寒の候は非常に美味で、春になると臭氣が出來て不味くなります。昔は隨分澤山の野猪が群を成して田畑を荒したそうですが、今は餘程少なくなつた樣で在ます。然し夜間山路を通りますと、ガサ〳〵大きな音をさせて過ぎ行く事が在ます。私も山間の友人の所に遊んで、夜分是れに出會したのは度々で在ます。闇を縫ふて小牛の樣なのが不意に眼前を過ると、餘り氣味の好いものでは在ませぬ。

毛革は固く　て餘り賞用はせられぬ樣で在ますが、毛は刷毛を作るに用ひます。それから少しく**猪狩の事**を御話しますが、一月にも雲の畑御獵場で、連日の猪狩が在まして新聞にも其模樣が出て居りましたから、餘り長くは書きますまい。昔は**陷穽**を設けて捕へました、是れは**猪道**と申て、野猪は常に定まつた道を通ります。是れを考へて其途中に穴を掘り、上に枯枝や草などを

置いて、明らぬ樣にして置ますと、野猪が其中に陷り、飛出るには餘り深過ぎて困つて居る所を、竹槍（青竹を片削ぎに尖らしたもの所謂猪突き槍）で突き殺したので在ます。又猪道に**地電火**樣の仕懸をした事も在ますが、是れを蹈迷ひたる旅人が懸つて死んだ事も在まして、實に危險極まるので固く禁じられて居ます。今は專ら鐵砲で打ち捕ります。此銃丸は丸い經三四分位の鉛で在ます。山路を行ますと三四尺位の高さに、竹や木を集めそれに草などを着けて、自然の枯野と見境のない樣に作つた、小さい袖垣樣のものが在ます是れは**猪垣**と申して獵師の障蔽で、獵師は猪途と推夫途（獵師途とも申細い人道）との、交叉點に猪の來るのを待ち受けて、打ち捕るので在ます。

勢子や獵犬に獵立てられて、逃げ出したものが元來速力從等に勝つて居ますから、稍落ち延びると少しく息休めに、トットッと緩くやつて參ります此所をかの猪垣の隱からズドン一發打つので在ます。若し猪が群を成して來る場合には、獵師は注意して最後のものを打ます。若前のを打ますと右往左往に散亂して仕舞ますからで在ます此時誤つて銃丸が急所を外れて斃るゝに到らず、狂ひ出しますと是れが卽ち**手負猪**實に危險極まるもので、向つては迚もたまりません。唯遠卷きに見失はぬ樣にして、其疲れを待つて打捕るので在ります。然し獵者の數の少ない場合には、其儘に見逃がして仕舞ふ事が出來ます。斯樣なのが山中に徘徊しますと、恐ろしいもので人に逃げるどころでなく、却て向つて來りますから何れも外出を警戒します。猪狩は冬期に致します。是れは肉の美味なる計りでなく、冬枯の野山見渡すに便利だからで在ます。寒風凛として轉た悽慘を極むる折、殊にも雪中の猪狩などは一層勇壯なもので在ます。獵犬が猪を見付け出ますと、一種悲愴痛快なる聲で吠え立て勢子の「さゝら」打つ音、叫聲と相和して山彥に響き渡る、と思ふと天地を貫く銃聲點々其間に加は

り、遂には數十貫の山幸の得物は、その四足を縛られ人の肩に擔はるゝ、マア一種の戰場で在ます。

最後に付加へて御話しますのは

豚の祖先は野猪で在ますと申事は其外形を見ても直ちに會得の出來るので在ます。豚には、東洋種と、西洋種と在りまして、我國の豚の多くは前者に屬します。脚は短くて耳が立つて居る、原産地はジャワ、スマトラ、邊りで、内地産の野猪とは違ひます、動物園の臺灣産の野猪も、種類は違ひますか稍是れに近いので在ます。後者の原種は、歐洲の沼澤に棲む種類で、前に申述べた五十六七貫目に達するものを、祖先にしたので在ますから、非常に肥大なる豚で在りまして、近頃は我國にも澤山輸入して居ます。耳殼は垂れて脚は割合に長いので在ます。

豚は古い家畜で、支那に飼養し初めたのは四千八百年前、埃及では三千五百年前、と申ます然し歐洲では千餘年前に、漸く飼養し初めたそうで在ます所が我國では支那より琉球に輸入したのが二百餘年前其から薩摩大隅に傳はつのは僅かに百年計以前の事で、各地に傳播したのは遙に降て維新前後と思ひます。

初め野猪を飼養し初めた人は、其肉の美味なると量の多い事に着目したのでも在ませうが、彼れの食物も大に因を爲して居ると思ひます。祖先の野猪が混食で在る上に、飼養するに從つて殆ど何でも、瓦石を除くの外は食する。汚物は勿論、氣味の惡い御話ですが、我兒の死骸までも食べるので在ます。

豚は肉を採る爲めに飼養するので、其飼養上の陶汰から、次第次第に肥大なるものを得る樣になつたので在ります。此後でも倍々選種に注意すれば良種を作り出す事が出來ませう。

豚は感覺の鈍いもので、私の子供の時隣屋敷に飼つて置いたのを見ましたが、背上に鳥が止まつて啄いて居ても、平氣で遊んで居るのを見ました。是位ですから寒熱共に耐え得るので、何れの地方でも飼養する事が出來ます。

養豚事業は近時頗る盛んで、其專門書も澤山に在る樣で御座いますから、此語はもう是れで御仕舞に致ませう。